

## 笑顔の源！私のひいおばあちゃん

兵庫県 仁川学院小学校五年 深川 雪乃

お母さんのお母さんのお母さん。

つまり、私のひいおばあちゃんは、今年九十八才。まっしろな髪  
の毛とまっしろな肌をもった、ほわっとしたかわい顔のひいお  
ばあちゃんだ。見ためとは違つて、しつかり者のひいおばあちゃん  
はいつもみんなのことを考えてくれる。すぐ近くに住んでい  
るため、私が赤ちゃんの時は、お母さんを手伝つて私のお世話  
に毎日来てくれた。足を使わないと寝たきりになるからと、  
日課である早朝の散歩をしていて事故にあつてしまい、足が不  
自由になつてしまったが、今でもとつても元気だ。

そんなひいおばあちゃんだが、何年前から少しずつ、人の  
顔を思い出せなくなつたり、ものを覚えていことができなくな  
つた。これは、事故のときに受けた手術の麻酔のえいきよ  
もあるらしく、私はそれが残念で仕方ない。

「おばあちゃん、いま何をやつたわけ。」と聞くとき、

「えーっと……五十六才ぐらいやつたかなあ……。」と一生懸命  
に考えて答える。五十六才だと、娘である私のひいおばあちゃん  
より若くなつてしまふ。その場にいた全員が大笑いした。毎  
年、春と秋に面接に来る市の職員さんが部屋に入つてきたと  
きには、いきなり知らない人が現れてよほどおどろいたのだろ  
う、なぜか警察の人だとかんちがいしてしまい、「あの、私なん  
にも悪いことしてませんけど……。」とオロオロした。もちろん、

市の職員さんも思わずにつこりである。

終戦前年の一月。ひいおばあちゃんが、生後一週間のおばあ  
ちゃんをおぶつて雪が降り積もる中を大勢の人とともに岐阜  
まで逃れたとき、ようやくの到着にほつとしてふりむくと、背  
中の赤ちゃんは息ができず、真つ青な顔をしていて。びつくり  
したひいおばあちゃんは、必死で赤ちゃんの体を温めたそうだ  
が、自分のほうが死ぬかと思うほどこわかつたと言う。もし  
も、あの時ひいおばあちゃんが気づかずにいれば、今私はここ  
になかつた。そう思うと、六十年以上も前の出来事と、今の  
自分が決して無関係ではないんだなあと思う。

ひいおばあちゃんは、昔のことならいろいろなことを覚えてい  
る。そして、目をきらきらさせながらそのころの話を聞かせて  
くれる。私には、それが少し不思議だ。

そして不思議なことがもう一つ。この最近、自分の弟や子供  
や孫の顔も思い出せないことがあるひいおばあちゃんだが、ひ  
孫である私の顔を忘れたことはないのはなぜだろう。

「ゆきちゃんかあ、よく来たねえ。」この言葉を聞くと、私はい  
つもうれしくなる。

私は毎日少しずつ大きくなるけれど、ひいおばあちゃんはだんだ  
ん赤ちゃんみたいになっている。今度は私がお手伝いする番だ。

ひいおばあちゃん、ありがとう！